

令和2年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属坂戸高等学校	校長名	田村 憲司
幼児・児童・生徒数（R3.3.1現在）	468	学級数	12
2 教育目標等			
① 学校教育目標	<p>複雑で予測の難しい社会の変化を前向きにとらえ、多様な他者と協働して新しい未来の姿を構想し実現していく人材となるために必要となる資質・能力を、総合的・体験的・実践的な教育を通して育成する。（「Engage today. Empower tomorrow.」）</p>		
② 学校経営方針	<p>>総合学科パイロット校としての使命を果たすため、社会の要請に即した教育のあり方を研究し実践する。 >本校の特徴を最大限発揮できるカリキュラムの開発を進め見える化する。 >完成年度を迎える国際バカロレア日本語ディプロマプログラム（IBDP）を円滑に運用するため、校内資源の効率的な運用に努める。 >個人の能力に依拠した組織から、学校の目標を教職員全員が理解し、その実現のために力を合わせるという組織体として行動できる学校を目指す。 >教職員の研修の機会を確保し自らの専門性を高めようとする雰囲気の醸成に努める。 >科研費など外部資金の申請を増加させる。 >大学との連携について、お互いの利益になるような取り組みができるよう働きかけを行う。 >受験者数を増加させるため、本校教育に対する地域社会の理解を促進するとともに、IB教育などに理解のある保護者および受験者層の新規開拓を行う。 >教職員の勤務について客観的に実態を把握するため、ICカード型の勤怠管理システムを導入する。その上で、適切な働き方について検討する。</p>		
③ 重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・WWL 事業拠点校としての役割を果たす。 ・カリキュラムマネジメントにもとづく指導および評価について徹底を図る。 ・IBDP 最終試験で一定の成果を上げる。 ・目標を共有し行動できる組織を目指す ・主体的な研修・研究を促す。 ・受験者数の増加を目指す。 ・勤務実態の把握に努める。 		
④ 前年度（平成元年度）の成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> ・WWL 拠点校として、国際FW、国際シンポジウム、全国フォーラムなど実施することができた。 ・WWL 事業の一つでもある阿賀町校外学習の初年度について、関係機関（阿賀町、新潟大学、JTB）と協力して、本校としてのプログラムを実施することができた。 ・生徒募集企画としてフォーラムを開催し、本校の教育の特徴を地域社会へ浸透させる活動を行った。一朝一夕に成果が出るものではないので、継続して進めることが必要である。 また、社会貢献活動やボランティアなどに関わる教員や生徒が増えてきているのでこの流れが継続できるようにしたい。 ・次期学習指導要領への対応を十分進めることができなかった。次年度においてスピード感を持って進めたい。 		

3 重点目標達成についての総括的評価

・WWL 事業拠点校としての役割を果たす。

海外での活動は Covid-19 の影響でほとんど中止となったが、国際シンポジウムや国内での FW の開発など可能な範囲で活動を継続した。国内 FW の可能性を探るよい機会となった。

・カリキュラムマネジメントにもとづく指導および評価について徹底を図る。

令和 2 年度はこれまでの本校の取り組み、特に 1 年次「産業社会と人間」、2 年次「T-GAP」、3 年次「卒業研究」の学校全体としての位置づけを検討することができた。この 3 つの科目（領域）をカリキュラムの中心におき、教科科目の位置づけを明確にしていく。

・IBDP 最終試験で一定の成果を上げる。

別資料で報告したとおり、最終試験は滞りなく運営できた。また、6 名受験し 5 名合格、スコアも世界平均を上回った。

・目標を共有し行動できる組織を目指す。

管理職による職員間の職務調整不足により、職員の業務負担・ストレスが過度になる状況が生じた。

・主体的な研修・研究を促す。

コロナ禍でもオンラインによる研修会などが各地で多く開催された。積極的な参加について声かけを行ったが、校内業務も増大しており、参加することが難しかった。

・受験者数の増加を目指す。

令和 3 年度入試では、本校希望者は 10 名程度減少した（第一志望者）。かなりの回数のオンライン説明会（個別相談含む）、学校見学会などを実施した。今後、本校に対する理解をさらに広げる必要がある。

・勤務実態の把握に努める。

令和 2 年 4 月より、IC カード型のタイムカードを導入し、出勤時と退勤時に打刻を行うようにした。教員の労働時間を客観的に把握することが可能なり、加えて働き方改革を早急に進める必要性についても認識できた。

4 令和 3 年度の学校課題

WWL 事業の最終年度となる。Covid-19 の影響により海外フィールドワークの実施は難しい。代替となる国内のフィールドワークについて早急に検討し、実施する必要がある。

IB 運営は昨年度最終試験を実施し、よい成績をあげることができたが、運営にともなう組織の改編などで教員の負担感は増大しており、ストレスチェックでもその点について指摘を受けている。加えて、IBO の確認訪問が令和 4 年度に実施されるにともない事前提出資料の準備を進める必要がある。業務の分担について対応する必要がある。

変形労働時間制のルールにもとづく適切な勤務管理の在り方を早急に整備する必要がある。タイムカードを導入し教員の出退勤時間を把握できるようになったことで、働き方改革を早急に進める必要性がはっきり認識できた。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

・WWL のフィールドワークについて昨年から実施しているアジア学院での取り組みや、2 年次校外学習の実施を通じて目的を達成するための方法を検討する。

・IB 運営については絶対的に人員が足りていないため、人事枠の確保について関係機関に願う。

・職員のコミュニケーション促進と業務の効率化に向けて、職員室を整備する。

・勤務カレンダーを実質的に運用するためのシステムを導入する。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

筑波大学附属坂戸高等学校 研究紀要 第 58 集

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業 令和 2 年度研究報告書

第 2 回 WWL 研究大会 第 24 回総合学科研究大会資料集～共に学び未来を創造する総合学科の学び～

学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和2年度

学校名	筑波大学附属坂戸高等学校
-----	--------------

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	<p>コロナ禍のため、海外FW、国内FWともにほとんど実施できなかった。</p> <p>分散登校期間については登校しないとできない内容（専門科目の実習など）が実施できるよう、時間割を変更し対応した。ただ、全体としては本校の特徴である社会につながりながら様々な課題について考える機会は十分に実施できなかった。</p>
1-1-7	コンピュータや情報通信ネットワークを効果的に活用した授業の状況	<p>臨時休校期間は4月13日からオンライン授業を開始することができた。6月中旬から分散登校期間となったが、その場合も自宅での学習を進められるようにするため、オンライン授業も併用した。コロナ禍によって教員のICTスキルも向上した。</p>
1-2-1	学校の教育課程の編成・実施の考え方についての教職員間の共通理解の状況	<p>月に一度開催される教育課程検討委員会において教育課程の点検作業を進めた。令和元年に新しくした学校教育目標については、教員の中で理解が進むよう機会あるごとに話をした。教育課程の編成にかかわるところまで話を進めることができなかったが、令和3年度に進めていくことで共通理解を図ることができた。</p>
1-2-3	児童生徒の学習について観点別学習状況の評価や評定などの状況	<p>年間学習指導計画に観点別評価に関する事項を含む評価計画を記載するとともに、生徒に対して評価評定の付け方について、年度初めに丁寧に説明するよう申し合わせを行った。成績について保護者から疑義を呈する問合せなどはなかった。</p>
2-1-1	学校の教職員全体として組織的に進路指導に取り組む体制の整備の状況	<p>進路指導部を中心に適切に対応できた。年度途中で進路指導担当を変更したが、その後の指定校推薦などの手続きについても滞りなく進めることができた。一部、学年と分掌との認識の違いにより少なからずトラブルもあったが、大きく問題となることはなかった。</p>
3-1-1	学校の教職員全体として生徒指導に取り組む体制の整備の状況	<p>生徒指導部を中心に適切に対応できた。コロナ禍で既存の行事について運営がままならなかったが、特に制服の標準服化や整容規定の見直しなど、生徒と共に学校生活に於ける新しいルールづくりを進めることができた。</p>
4-1-1	児童生徒を対象とする保健（薬物乱用防止、心のケア等を含む）に関する体制整備や指導・相談の実施の状況	<p>毎年実施している薬物乱用防止講演会は実施できた。親子関係の問題から薬の過剰摂取を行うなど、悩みを抱える生徒もいる。潜在的に自傷行為におよぶ生徒も居る可能性もあり、その前提をもって体制を整える必要があるが、十部に対応できていない現状である。</p>
5-1-5	学校事故等の緊急事態発生時の対応の状況	<p>令和2年度は救急車を要請した生徒に関する事案が2件、教職員に関する事案で1件あった。いずれも適切な対応ができた。また、学校敷地への不審者の侵入事案が2件発生した。本事案については警察の捜査に協力し対応した。</p>

6-1-3	校内委員会の設置、特別支援教育コーディネーターの指名や校内研修の実施等、特別支援教育のための校内支援体制の整備の状況	SCに加えて、新しく配置されたSSWとも連携したサポート体制をつくることができた。課題を抱える生徒も多い中、支援コーディネーターを中心に適切な対応ができています。一方で、学校の指導だけでは対応できない事案も増えてきているため、関係機関との協力が必要である。
8-1-1	授業研究の継続的实施など、授業改善の取組の状況	本校では例年3回の授業公開の機会を設けている。令和2年度はコロナ禍の影響により、授業公開ができたのは2月に実施した研究大会のみとなった。一方、生徒による授業評価についての議論を進め、令和3年度より生徒による授業評価を学校全体で実施することを決定した。
8-1-4	校内研修・校外研修の実施・参加状況	将来構想に関するワークショップをはじめ、1～2ヶ月に1度程度の校内研修会を実施した。コロナ禍においても学校外のオンラインによる研修会などが開催されていたため、参加について声かけを行った。
9-1-1	児童生徒や学校の実態、保護者や地域住民の意見や要望を踏まえた学校としての目標等の設定の状況	坂戸市教育関係者との懇談などを行った。本校としては現在の教育実践を発展させる方向で今後も学校運営を考えていきたい。
9-1-7	外部アンケート等の実施と自己評価への活用状況	保護者および生徒へのアンケート調査を実施した。本調査は令和3年度から毎年実施する。
10-1-3	児童生徒の個人情報の保護の状況	大学の個人情報に関する調査や監査によるチェックに加えて、基本的な確認事項（USBメモリの使用方法、成績管理など）については、機会あるごとに注意喚起を行った。
11-1-1	学校運営へのPTA（保護者）、地域住民の参画及び協力の状況。	コロナ禍のため、PTA後援会活動もかなりの面で実施できなかった。
14-1-99	筑波大学の附属学校として	将来構想に向けた校内議論を通じて、附属学校としての役割について考える機会をつくることができた。